

村崎雫は、金玉大好きスケベギャルで、良い匂いがする

## 1. 弱味を握られ、金玉を握られ

自分の生活を振り返ってみると、優等生と呼んでも差し支えが無いと感じた。

とは言え、学級委員長などの役職に名乗りを上げる様な積極的な優等生ではない。不良の正反対に位置しているだけ、といった消極的なものである。

二年生も半ばを過ぎたが、遅刻・欠席は一度も無い。その他、校則違反を犯した事も、赤点を取った事も無かった。

それが普通では無いのかと問われれば、その通りに違いない。だからこそ、俺は敢えて自らを優等生と称する。侮蔑的な意味を込めて。

不良が格好良いとは思わないものの、場数を踏んでいる事だけは認める。

俺の様に、たかが寝坊で青褪めたり冷や汗を掻いたりはしないだろう。するのであれば、それは不良でも何でも無い。

常習犯と化すのも問題だが、酷く狼狽するのも問題だろう。

過ぎてしまった事は仕方がない、と楽観的な態度を取りつつ、次が無いようにだけ気を付ける。それが望ましいのではないのかと思う。

実際、俺が幾ら悔やもうと嘆こうと、時間が巻き戻る事は無いのだ。

息を切らして自転車を漕ぎながら、昨夜の自分を憎悪した所で、昨夜の俺はへらへらしながら動画を眺めて夜更かししているのだ。

そうした事を必死になって考えるも、焦燥感と絶望感は拭えない。

だからこそ俺は、蔑称として自分を優等生と呼ぶ。

学園に着き、腕にはめたデジタル時計を確認する。遅刻である。

初秋の朝のうすら寒い風を受けていたとは言え、家を出てからずっと全力だった。全身に汗を掻いている。

俺は自嘲的な気分になり、吐き捨てる様に短く笑った。

ここまで必死になる事だったろうかと疑問に感じてしまう。金を貰って仕事を請けているのならともかく、寧ろ逆、俺、いや、俺の親が金を出す側なのだ。

遅刻してしまった自分自身への慰めと言い訳であったが、今の俺には筋の通った言い分である気がした。だから遅刻ぐらい、どうって事は無いのだ、と。

そうして何とか心を落ち着かせると、疲れがどっと湧いて来た。

足が重たくて仕方ない。校舎に入るのは少し休んでからにしよう。そう考えて、自転車置き場の物陰に腰を下ろす。

初めての遅刻に対する緊張と不安。必死になって自転車を走らせた疲れ。その両方がすうっと抜けていく。すると何故だか、陰茎が主張を始めた。

一部を除いた男子学生なんぞ常に性欲を持て余しているものであり、不意の勃起には慣れているものだろう。もちろん俺とて、そうだ。

腰を上げると、すぐにベルトを緩め、ズボンに手を突っ込んだ。陰茎を下腹部に押し付け、トランクスのゴム部分で挟む。これでズボンの乱れを直せば膨らみが目立つ事は無い。勃起は放って置けば治まるだろう。

一仕事終わったつもりになった俺は、そのまま校舎へ向かって歩き出した。

ふと、今日は全校朝礼があった事を思い出した。

教室へと戻る移動の群れに紛れてしまえば目立たないのではないかと考える。

目立つか、目立たないか。注目を浴びるか、浴びないか。

そうした事に思いを巡らせていると、次第に心が弱っていく気がした。ともすれば悪目立ちする恐怖に駆られ逃げ出してしまいたくなる。俺は無理にでも強気を演じる事にした。

遅刻が何だ。俺は今日限りで優等生卒業だ。自分にそう言い聞かせ、力強く呼吸をする。肩を怒らせながら歩いた。

昇降口に入った頃には、すっかり強気になっていた。

実行する気など更々無いながら、窓ガラスでも叩き割ってやろうか、などと心中で息巻いていた。

こんな具合に、気分の急な上昇と下降を繰り返していた為か、俺は冷静ではなかった。魔が差す隙が生じていた。

当然ながら、殆どの下駄箱には下履きが収められている。これが上履きであったのなら、学園指定の野暮ったい白を基調とした物である為に、変な気は起こらなかつたかも知れない。

どうしても汚れの目立つ白い上履きに比べて、下履きは濃い色の物が多く、不潔な印象は殆ど抱かなかつた。

その為に、俺は光沢のある茶色のローファーを前に、生唾を飲んだ。

嗅いで見たいという思いがどこからともなく胸に去来していたのだった。

女性経験も無ければ、姉や妹もおらず、自分と同じ年頃の異性の臭い、とりわけ、足の様に嗅ぐ機会の無い部位などは、どんな臭いがするのか想像も付かない。嗅いで見たいと思ったのも今が初めてだった。

性的欲求を満たす為、というよりも、好奇心が勝っていた。

どんな臭いがするのだろうか。男と変わらず臭いのだろうか。

一度気になり始めると止まらなかった。

下駄箱の幾つものにも区切られた棚の一つに手を伸ばす。好奇心が勝っているのは事実だが、性的な感情が無いではなかった。

俺が手を伸ばしたのは、同じクラスの女子という括りの中でも一二を争う美人である、村崎雫（むらさき しずく）のローファーだった。

目を惹く容姿をしており、殆ど話した事が無いにも関わらず、同じクラスになって早々に名前を記憶した覚えがある。姓名の語感が心地良く、心の内で名を呼ぶ際には決まって姓名を用いた。

村崎雫。名前の次に印象的なのは、目だろうか、髪だろうか。俺はどちらも同時に思い出す。眠たげにも見える色っぽい瞳。派手な色は禁止という曖昧な校則の間隙を縫った、青みの入った黒く艶やかな長い髪。

そのまま彼女を構成する要素を次々と思い出していく。

筋の通った鼻梁。鮮やかな色をした瑞々しく小ぶりの唇。間違いなく大きい方に分類されるであろう胸。スカートから覗く真っ白な太もも。内面に関しては良し悪しを判断する程、親しくない。が、几帳面にして綺麗好きであるらしいというのは、おぼろげながら知っている。

そんな村崎雫のローファー内にはどんなニオイが満ちているのだろうか。

俺はとうとう好奇心に屈してしまい、片方を手に取った。

周囲に人が居ない事を素早く再確認し、ローファアの履き口に鼻を突っ込んだ。

緊張の為に嗅覚が鈍っていたのか、始めは何のニオイも感じ取る事が出来なかった。

そんなはずは無い、と鼻を鳴らす。微かにではあるが、匂いを捉えた。

柔軟剤のそれだ。靴下から移ったのだろう。

良い匂いである事は否定しないものの、どこか肩透かしを食らった気分だ。もっと何かあるのではないか。根拠の無い期待が胸に生じ、もう一度試す。

今度は深く、ゆっくりと、鼻からたっぷりとローファア内の空気を吸い込んだ。

相変わらず大部分は柔軟剤の香りであるが、ほんのりと汗臭いような、埃臭いようなものが混じっているのを認めた。

途端に、俺の顔は真っ赤になった。

今更ながらに、変態的な愚行を犯している自分が恥ずかしくなった。それは、村崎雫のローファアに、微かながらに染み付いていた体臭に、性的なものを感じた為に他ならなかった。

いつの間にか萎えていた陰茎が、むくりと身を起こし、制服のズボンにテントを張る。その“支柱”は狂おしいまでに切なく疼いている。

俺は深々とローファア内の空気を吸い込みながら、ズボン越しに陰茎を撫で摩った。

「んふんっ」と、間抜けな声を漏らしてしまう程、気持ち良かった。

普段の自慰では声など出ない。性的な快感を得て喘いでしまうなど、初めてだった。

すぐにでも止めなくてはならない。俺の中に残る冷静な部分が警告を発する。確かにその通りである事は、発情した頭でも理解出来る。

だが、逃してしまうには惜しい快感だ。次の機会があるとも考え難い。

止められなかった。

直接握って扱くよりもずっと気持ち良い。

俺は自分が昇降口に居る事や、ズボンを穿いたままである事など忘れて絶頂へ向かいつつあった。

トランクスは既に我慢汁でぐっしょりと濡れている。不快ではなかった。寧ろ、それだけ自分が興奮しているのだと客観的に捉える事で、ますます盛りが付いた。

「何やってんの、宮内（みやうち）」

不意に声を掛けられ、俺はその場で飛び上がらんばかりに驚いた。

手から力が抜け、ローファーが落っこちた。

反射的にそれを拾おうとして腰を屈めつつ、声のした方へ振り向くという中途半端な体勢で、俺は村崎雫の姿を認めた。

顔から、さっと血の気が引いていった。誰に見られても不味い状況であったが、よりよって本人が相手とは。俺の頭は真っ白になっていた。

「……靴の臭い、嗅いでた様に見えたけど？」

俺はぎこちない動きで首を横に振った。

「もっかい同じ事やって見せて」

再び首を振る俺に対し、村崎雫は言う。

「やらなきゃ言い触らすから。ねえ、誤魔化せるとってんの？」

言い触らされたくない一心で、俺はローファーを拾い上げ、そこへ鼻を突っ込んだ。

「左手はそこじゃなかったでしょ」

俺は羞恥と恐怖から、視界の端にさえ村崎雫の姿を捉えて置く事が出来ず、顔を思い切り背けながら、左手で股間に触れた。

——カシャッ。

シャッター音を耳にして、俺は声を掛けられた時と同じぐらいに驚き、  
またもローファーを取り落とした。

「宮内って変態な上に、馬鹿だったんだ。ねえ。いくらアタシが言い触らしたからって、精々陰口止まりだったのに、証拠が出来ちゃったら、停学も有り得るよね？」

動悸が激しい。脅しを掛けるつもりなのではないか、と思い至るのに時間が掛かった。

「……か、金なら無いぞ」

やっとの思いで搾り出した俺の声は、酷く震えていた。

脳裏には、青い顔をして親の財布から一万円札を何枚も抜き取る俺の姿が思い描かれていた。

「ぷっ。なにそれ。……まあ。脅すつもりなのは間違っていないか。とにかくさ、この写真を誰かに見せる前に消して欲しかったら、放課後、音楽室に来て」

「……分かった」

どんな要求を突き付けられるのかは不安だったが、この場は穏便に済んだ事に安堵する。

が、村崎雫の一声で、俺はすぐに窮地へ逆戻りさせられた。

「で、誰の靴、それ」

「あっ。え？ は、いや、これは……。あ、いや……。ご、ごめんなさい……」

近付いて来た村崎雫に対し、俺は顔を真っ赤にしてうろたえていた。

「アタシのじゃん。……ふうーん。ま、とにかく、放課後、音楽室だからね」

俺は何度もコクコクと頷きながら、ローファーを靴箱に戻し、そそくさと昇降口を離れていった。

\*

悪い方にばかり想像が膨らんでいった。その反動なのか、時折、妙に都合の良い妄想が間に挟まった。それは、責任を取って恋人になれ、と村崎雫に迫られるという、出来の悪い官能小説の導入めいたものであった。

さて置き、基本的には悪い方にばかり考え込んでいた俺は、気が気でないままに日中の学園生活を終えた。

対する村崎雫は、一人の男子の生殺与奪権を握っている事など微塵も感じさせない普段通りの振る舞いをしていた。



音楽室へ行ったら、余計に事態が悪化するのではないか、と不安になりながらも、逃げたら逃げたで、大変な事になるだろうという恐怖から、俺は逃走を諦めていた。

道すがら、何故、音楽室なのだろうか、と考えてみたが、答えは簡単だ。

この学園には吹奏楽部も軽音楽部も存在せず、放課後の音楽室は無人である為だ。

俺の知らない所では告白スポットとして活躍しているのかも知れない。

そんな事を思うと、溜息が漏れた。

人生で初めて女子に呼び出されたかと思えば、脅迫の為だなんて。自業自得とはいえ、肩を落とさずにはいられなかった。

音楽室のドアを開く。この時には不満よりも緊張が勝っていた。

金品ではないらしいが、だとしたら一体なんだろうか。

強面の巨漢がぞろりと並んでおり、ボコボコに殴られる訳で無ければ良いが。

果たして、音楽室内には村崎雫の姿しかなかった。

彼女は机の一つに腰掛けて携帯端末を操作している所だった。

顔をこちらに向けた彼女が言う。

「ちゃんと来たね。逃げちゃうかな、とも思ってたんだけど」

「……逃げる訳にはいかないから」

「ま、そうだよね。写真、ほら、良く撮れてるもん」

そう言って、今朝の俺を画面に表示した携帯端末を左右に振って見せる。

遠目である事に加えて揺れている為に、ぼんやりとしていたが、改めて目にすると、酷く浅ましい姿だと思えた。

故にか、自然と、謝罪の言葉が口を衝いて出た。

「あの。本当に、悪かった。ごめん。許してくれとは言わないけど、もう二度とあんな事は……」

「ちょ、ちょっと！」

何故だか村崎雫が慌てた様子で駆け寄ってくる。

俺はぎよっとなって、後ずさった。こんな状況でも揺れる胸が気になり、顔が熱くなった。

「急に真面目ぶらないでよ！ 脅しにくくなるじゃん！」

なるほど、と奇妙ながらに納得がいった。

今朝も謝るには謝ったが、あれはどちらかと言えば反射的なもので、今は申し訳ないという気持ちからの言葉だった。そういう素直な謝罪というのは、人に影響を与えるらしい。慌てる村崎雫然り、誠意を見せようと覚悟を決めた俺然り。

「……俺に出来る範囲の事でなら、ちゃんと償う」

「出来る範囲って？」

「……その。……身勝手かも知れないけど、周りに迷惑が掛からない様な事なら」

「うん。それなら全然大丈夫。アタシと宮内だけで済む事だから」

あ、と俺は思った。

村崎雫には、何か俺にして欲しい、具体的な事があるらしいのだ。それが二人の内々で済むと言う。

性別が逆であれば、性行為の強要などが思い浮かぶが、男である俺に、女である村崎雫が一体何を求めると言うのだろうか。

俺は黙っていた。村崎雫が要求を口にするのを待っていた。

しばしの静寂を経て、彼女は落ち着き無く視線を彷徨わせながら、ボソボソと何かを喋った。

俺には「ま」と「いじ」と、いう音しか聞き取れなかった。

「悪い。何て？」

「え、えっと……その……」

村崎雫の頬が赤い。俺は少しばかりドキドキとして、付き合ってくれ、だとか、エッチしてくれ、だなんて台詞が出るのではないかと、期待してしまう。

「きっ、金玉、虐めさせて！」

「……え？」

思わず呆けた様な声を上げてしまう。

村崎雫は「金玉」と言った。「虐めさせて」と続いた。

「……え？」

「その、アタシ、弟が居てさ。小さい頃に金玉ぶつけて痛がってる所を見て、可哀相って思う反面、凄いドキドキしちゃって。お互い小さい内は、その、弟に頼んで、弄らせてもらってたんだけど、やっぱ、やっぱさ。その……ある程度大きくなったら、不味いじゃん、そんなの。で、でも、金玉……には……やっぱり興味があって……」

前半は物凄い早口で、後半は消え入りそうだった。

俺は何と答えて良いのやら、目を瞬かせるしかなかった。

「あのさ！」

にわかに村崎雫が大声を上げ、俺は肩を震わせた。

「臭いフェチだって言うなら、アタシの臭い嗅いで良いから、代わりに金玉虐めさせてよ！」

「あ……。えっと……それで写真を消してくれるなら……」

俺は勢いに押されて、そう答えていた。

答えてから不安になった。

虐めると言っても、どこまでやるつもりなのだろうか、と。

事と次第によってはとんでもない事に同意してしまったと言える。

が、目をうるうるさせた村崎雫に「良いの……？ 本当に……？」と、問い掛けられ、首を横に振る事など出来なかった。

「でも、その、お、お手柔らかに……お願いします……」

我ながら何を言っているのだと思わずにはいられなかったが、言わずにもいられなかった。

「うん、うん。大丈夫、大丈夫。うふふ」

あからさまに嬉しそうな村崎雫に反して、俺は不安だった。

本当に大丈夫なのだろうか。

「ねえ？ さっそく良い？ 金玉触っても」

「お、おお……」

やはり勢いに押されて、俺は曖昧に相槌を打ってしまった。

村崎雫は「えっへへ」などと教室では聞いた試しのない笑い声を上げながら、俺の足元にしゃがみ込んだ。

カチャカチャと音を立てながら、ベルトのバックルを外そうとしている。

「ちょ、ちょっと、待って。じ、直に触るのか？」

「駄目？」

「いや……だって、学校だし……」

「……学校で靴の臭い嗅ぎながらシコってた癖に」

「……あ、う……まあ……」

「冗談だって。最初は下着越しにしとくね？ それなら良いでしょ？」

村崎雫が俺を上目遣いに見やる。やはり目元が眠たげにも見える事に変わりないが、いつもより瞳がくりっとしている気がした。改めて可愛い顔をしていると感じた。

最初は、という物言いが気に掛かったものの、俺は彼女にかなり絆されており、「下着越しなら」と了承してしまう。

了承を得た途端、村崎雫は遠慮なしに俺のズボンを膝まで下げた。

トランクスの中央は、こんもりと膨らんでいるが、村崎雫が気にする様子は無い。

彼女はすっと立ち上がり、俺の股座へと手を伸ばす。股下から突き上げる様にして陰嚢を握った。

「あっ……♡」

村崎雫の口からやけに色っぽい吐息が漏れ、俺は目を見開いた。

「やっぱり♡ この感触♡ 好き……♡」

そんな感想を艶かしく口にする。表情もトロンとしており、湯上りを思わせる瑞々しい色気があった。

むにゅ、むにゅ、と陰嚢を揉まれる。痛みは無い。かと言って気持ち良い訳でもない。意識は寧ろ、己にではなく、村崎雫にばかり向いていた。

彼女の艶やかな唇は小さく開かれており、そこから吐息とも嬌声とも付かない音が断続して漏れている。酷く淫靡であった。

「……ねえ？ 大丈夫？ 痛くない？」

「あ、ああ。痛くは無い」

「そっか。あのさ……臭いを嗅がせる代わりに、少し痛くしちゃ駄目かな？」

俺は別に異性の臭いに対して強い執着を抱いている訳ではない。それこそ、今朝の特異な状況で、初めて好奇心を覚えたぐらいだ。とは言え、色気を振り撒いている村崎雫におねだりされては、受け入れる他になかった。

「少しぐらいなら構わないけど」

「やった！ あ、えっと、腋で良い？」

「わ、腋？」

言われてそこを見やる。

衣替え前である為に、お互いにまだ夏服だ。半袖から覗く白い二の腕が眩しい。胸と上腕の境目が、妙に淫猥であると思えた。

「……腋は違うの？」

確かに、胸や股間とは異なり、以前から注目していた部位ではない。が、俄然嗅ぎたいという欲求が湧き始めていた。

俺は首を横に振った。

「じゃあ、どうぞ♡」

そう言って、村崎雫が左腕を上げる。露になった腋の下。薄っすらと汗染みが出来ているの目にして、俺は何故だか興奮してしまう。陰茎がどこかにすっ飛んで行くのではないかと危惧する程に強く脈を打った。

顔を寄せる。鼻を鳴らす。

科学的な芳香に混じって、汗の、というか、湿った、あるいは蒸れた、そうした水っぽい臭いがほんのりと感じられた。不快ではなかった。他に、思い込みであるのかも知れないが、彼女の肌の匂い、とでも言うのだろうか、微かに甘い匂いがしていた。

「金玉♡ 少し痛くしちゃうね♡」

すっかり匂いの虜となっていた俺は、村崎雫の声で我に返って身構えた。

じりじりと陰囊を握る力が強くなっていった。

「……うっ。くう」

「痛い？」

そう問う、村崎雫の声は弾んでいた。

「い、痛いけど、これぐらいならまだ……。なんとか、我慢出来る」

「そっか。じゃあこれぐらいの強さで金玉虐めるね♡ 声、我慢しないでね♡ 臭いを嗅ぐのも遠慮しなくて良いから♡」

「あ、う、う……。分かった……」

村崎雫は、睾丸をぎゅっ、ぎゅっ、と揉み潰しているのだが、女性経験が無く、更には異性に対する幻想（女の子は清潔、清純、上品、優しい、性欲なんてない、その他諸々）を抱いている俺にさえはっきりと断言出来る程、発情していた。

「あっ♡ あああ♡ ああ♡ あ……♡ あ、ああ♡」

村崎雫の口から、恍惚としたあられもない声が漏れているのだ。

声色ばかりでなく、体温も上がっているのか、腋に近付けている鼻先に温気（うんき）を感じた。

「くっ、う、うぐう……」

興奮の為に加減を忘れてしまったのか、睾丸を鈍い痛みが襲った。

「ああ……♡ 宮内の苦しそうな声♡ エッチい♡ ねえ♡」

「う……く……。な、何？」



「やっぱり、直接触りたい♡ ねえ♡ お願い♡ パンツ脱がなくても良いから♡」

甘い声が俺を狂わせていく。

分かった、と頷いてしまった。

恥じらいも躊躇いもなく、村崎雫は俺のトランクスに手を突っ込み、陰囊を握った。

「あっ……♡ ふふ♡ ここにも少し毛が生えてるんだあ♡ うふ♡ ふふっ♡」

村崎雫は愉しそうに陰囊を揉みしだしている。

対する俺は、亀頭に村崎雫の腕が擦れる事によって生じる快感に襲われていた。

「むっ、村崎さん！」

「ん？ 雫で良いよ♡ なあに？」

俺は息を詰まらせた。ここまで甘ったるい「なあに？」という問い掛けを聞いたのは、人生で初めてだった。女子という生き物は、男子が思っている以上にエッチなのかも知れない、なんて事を思った。

彼女に声を掛けたのは、腕が当たっている事を指摘する為だったが、こうなってくると、それしきの事を指摘するのは野暮である気がした。故に俺は、咄嗟に思い浮かんだ事を口にした。

「も、もっと腋に近付いても良い？」

「良いよ♡ その代わりに♡ もっと強くさせてもらおうね♡」

俺が村崎雫の腋に顔面を押し付けると同時に、彼女は睾丸をぎゅっと握り潰した。

「うぐ、あっ」

俺は妙な悲鳴を上げて腰を引いた。

「こら♡ 逃げちゃ駄目でしょ♡」

村崎雫はそう言って、俺の頭を抱え込んだ。胸が顔に当たるのもおかまい無しだ。

良い思いをさせてあげてるんだから、当然でしょ、とばかりに、村崎雫は睾丸を手の中で揉みくちやにする。俺は痛みに屈して何度も呻き声を上げた。

一際強く握られる。激痛。

「おぐうあっ！」

「やーん♡」

と、黄色い声を上げた村崎雫がハアハアと息を切らしながら言う。

「可愛い♡ やっぱり凄く痛いんだよね♡ 男の子の身体で一番弱い部分だもんね♡ 顔を見られないのが残念♡ 今の宮内、とってもエッチだよお♡」

「うぐぐ、う、むぐう……！」

「ねえねえ♡ 聞かせて♡ 女子に男の子の一番大事な所を痛め付けられるのってどんな気持ち？ ねえ♡ 宮内い♡」

村崎雫の、色っぽいどころか、もはや色情狂めいている声音に中てられ、俺は心情を包み隠さず吐露してしまう。

「うっ、くう。痛いのと、気持ち良いのと、わ、腋の匂いと、村崎さんのエッチな声と、ぐうう、で、でも金玉は痛くて、情けなくて、でも、やめて欲しくなくて……。と、とにかく頭の中がぐちゃぐちゃになってる……！」

「うふふふ♡ そうなんだあ♡ 可愛い♡ ねえ、どこが気持ち良いの？金玉？」

「う、う、あ。えっと、その、ち、ちんちんに、腕が当たってて……」

「え？ これ？」

と、村崎雫は、意図して腕を裏筋に擦り付けた。

「あうっ」

「ふーん♡ これが気持ち良いんだあ♡ じゃあ♡ 金玉袋♡ 下に引っ張りながら擦ってあげる♡ ぎゅう♡ ぎゅう♡」

「あ、あう、う、痛っ、気持ち良い、あ、あ、あ……。あああ」

村崎雫の腕と、俺の陰茎が擦れ合う。快感に喘いでしまう。堪らなかった。

朝、昇降口で彼女のローファーを嗅ぎながら、ズボン越しに陰茎を撫でていた時よりもずっと強い性感があった。

「あっ、あ、ああ……。ううっ、む、村崎さん、も、もうやばいっ！」

村崎雫が俺の言葉をどう捉えたのかは定かでないが、何かが起こりそうだというのは理解したのだろう。頭を解放したかと思うと、左手もトランクスに突っ込んで来た。

両手に一つずつ睾丸を握り、ぎゅうぎゅうと圧迫しながら、彼女は俺の顔をじっと見つめる。

村崎雫はとんでもなくエロい顔をしていた。

上気し、汗ばみ、恍惚としており、俺は生まれて初めて、生の、取り繕わない女の顔を見た気がした。

「アタシも♡ ヤバイの♡ すっごい♡ 気持ち良い♡」

ゾットする程、妖しい声だった。

俺は背筋をぞわぞわとした感触が這い上がっていくのを認め、腰の奥から熱い物が込み上げてくるのを感じた。

射精しそうになっている。まさか、と思う。少し前の様に、腕で擦られているのならともかく、今は殆ど睾丸しか刺激されていないのだ。

だが、込み上げてくる感覚は間違いなく射精のそれであり、俺は喘いだ。

「あっ、ああ！ イッ、イッちゃう！」

ぎゅっ！！

睾丸という弱い部位を握っている、という前提を差し置いても、その細腕のどこからそんな力を出しているのか、と不思議に思う程に強く圧迫される。

「うぐひっ！」

痛い。激痛だ。そこに快感などあるはずがない。

にも関わらず、俺は背を仰け反らせ、射精へ至ってしまう。

ぶびゅるる、びゅる、びゅるる、と精液が迸る、解放感。睾丸を圧迫される痛みが引き金となった射精であるが、快感は、手淫のそれを遥かに凌駕していた。

村崎雫が俺のトランクから両手を引き抜く。腕に付着した精液を見やり、その場で脱力して、ぺたんと座り込む。

精液を掛けられた事がショックだったのだろうか。俺はそんな風に考えたが、違っただけらしい。

「すご……♡ 凄い匂い♡ ねえ……♡ 今さ、おちんちんに触ってなかったよね？ 宮内、金玉だけで射精しちゃったんだよね？」

「う……。あ、ああ」

「はあっ♡ あああ♡」

感極まった風に呻いたかと思うと、村崎雫は腕に付着した精液を口元に向け、そして、ペロリとそれを舐め上げた。

「む、村崎さん」

「ふふ♡ 雫で良いって言ったじゃん。ねえ、どうだった？」

「え？ いやあ。それは……その……。凄かった」

「気持ち良かったの？」

俺は黙ってこくりと頷いた。

村崎雫はしばし、何も言わずに俺を見上げて微笑んでいたが、やがてこう口にした。

「ねえ、アタシ達、良い友達になれるんじゃない？ もちろんフツターの友達じゃなくて……セフレみたいな……。いや、セフレは違うね。『玉フレ』と『嗅ぎフレ』？ みたいな？ えへへ」

笑う彼女に釣られて、俺も微笑み返した。

思わぬ幸運が転がり込んで来たと言っても構わないだろう。

射精を終えて冷静になって見ると、村崎雫の性的嗜好というか、睾丸への執着心には少しばかり恐怖を抱かせられるが、彼女が魅力的な異性である事には変わりはない。

そんな相手と親密になれる、というのが幸運でなければ何が幸運なのか。増してや、俺は、本来であれば厳しく罰せられるべき愚行を犯した身なのだ。一方的に睾丸を痛め付けられてもおかしくない所を、対価として匂いを嗅がせてもらえたのだから、文句を言うのは贅沢だろう。